



# 備えない防災!?! 「フェーズフリー」という新たな発想

～(一社)フェーズフリー協会 代表理事 佐藤唯行様にお伺いしました!～

群馬県 県土整備部 都市計画課

## ■ はじめに

令和5年度は県内各市町村で防災ガイドラインに従う立地適正化計画の見直しなどもあり、防災は都市計画の分野でもホットなテーマになっています。

そうした中、災害に新たな視点から向き合った「フェーズフリー」という発想が、昨今、国内でも広がりを見せています。その広がりには既に災害対策やまちづくりの領域を飛び越え、今や教育分野にまで及んでいます。

今回、近い将来まちづくりでは必須の概念となりうる「フェーズフリー」について、街路樹の緑が眩しい初夏の雰囲気漂う5月某日、一般社団法人フェーズフリー協会を訪問し、代表理事の佐藤 唯行(さとう ただゆき)様にお話を伺いました。



フェーズフリー協会  
代表理事 佐藤唯行様

## ■ 取材内容【文章中、Qは都市計画課、Aは佐藤様】

Q：フェーズフリーとは？

A：横文字で捉えてしまうとわかりにくいのですが、「いつも」と「もしも」の垣根がないということ。非常時と日常時といった段階(フェーズ)から自由(フリー)であるということ。

日常時と非常時、どちらでも私たちが安心して豊かに暮らせる社会を作っていこうという概念がフェーズフリーです。

Q：つまり、フェーズフリーとは、「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン (以下UD)」と同じような概念でしょうか。何か違いはありますか？

A：バリアフリーやUDは「人の状態」(例：健常者と要援護者)をフリーにしています。対してフェーズフリーは「社会の状態」をフリーに考えています。

もう少し踏み込んで言うと「普段の私たちの暮らしを豊かにしているものが、もしもの時に、私たちの生活や命を守れるようにデザインされていれば良いよね」ということなんです。

この言葉でわかるように、日常の私達の暮らしを豊かにして、その延長線上に、非常時に役に立つものを考えたいという事です。

更に言えば、図1はフェーズフリーとUDの相関図ですが、実はフェーズフリーはこの図の斜めのラインを狙ったところもあります。

災害時は、例えば怪我をしたり視力を失ってしまったり等、誰もが要援護者になってしまう可能性のある状況になります。防災の政策は災害時、要援護者の為といわれますが、上記のとおり結局はすべての人達が要援護者になる可能性がある訳です。だからこそ図1の斜めのライン、つまり日常時の健常者にも非常時の要援護者にも役に立つようにデザインされている事が、本当に支援が必要な人にも役に立っていくというのが究極的なフェーズフリーになるのではと思っております。

Q：防災におけるフェーズフリーについて教えてください。

A：フェーズフリーという防災に関わる新しい考え方は、2014年頃から日本で始まりました。最初は「繰り返す災害を解決したい」というところからスタートしたんですよ。

安心安全な社会を作っていこうというその取り組み自体は防災と同じで、だから目的は一緒なんだけど、フェーズフリーと防災っていうのは、何が違うかっていうと『そのアプローチと対象が違う』っていうことなんです。

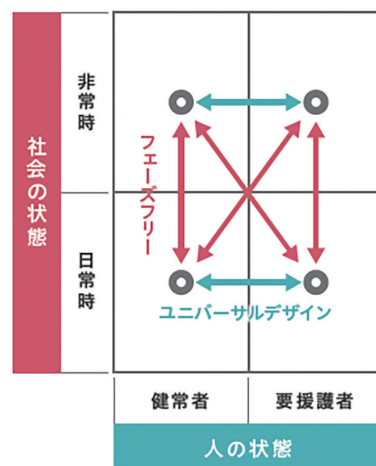
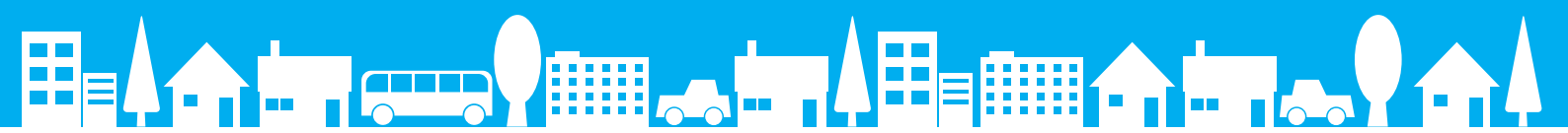


図1 フェーズフリーとUDとの相関図  
※図1～4提供：一般社団法人 フェーズフリー協会





防災ってというのはどういったアプローチをしてるかというと、繰り返される災害から安心安全な社会を作っていくために、備えてもらうということを前提として、社会を作っていくということなんですよ。

多分、群馬県の皆さんも日本中の皆さんも、世界中の人達も「防災はするべきだ」「災害から自分の大切な家族の生活、命を守りたい」って、ちゃんと思ってる。

にもかかわらず、例えば、今この瞬間群馬で震度7の地震が発生したときに、自分と家族を守るための備えが十分ですかって言われても、十分備えていると答えられる人はほとんどいない。

防災はするべきだというみんなの思いと、備えるっていうのがイコールになっていないんですよ。

繰り返す災害は解決したいけど、備えることは難しい。この相矛盾するような、2つを同時に抱えてしまってるのが、現状なんですよ。

つまり、行政から「災害に備えましょう」と提案するだけでは住民のことを守れない。

その代わりに、備えてもらうことが難しいのであれば、普段着ているその服だとか、使ってるボールペンだとか、利用してる携帯電話だとか、更に、普段遊んでる公園だとか、家だとか、町のあり方…普段私達の生活を豊かにし快適に便利にしているものが、非常時にも役に立ってしまったら、結果として、皆さんのことを守ることができるんじゃないだろうか、と。

日常的に使う便利なものや日常時の施策と、他方では非常時に役立つものや様々な施策や設備があって、今ま

では別々のものとして分けて考えられていた。それを分けずに、日常時も非常時も役に立つようにしよう、という概念が社会に定着したら、いろいろ変わってくるんじゃないか、ということです。

つまり、みんなが普段の生活で利用してる商品だとかサービスとか施設が、非常時に生活や命を守るようにデザインされていけば、結果として勝手に守れてしまう、という訳ですよ。

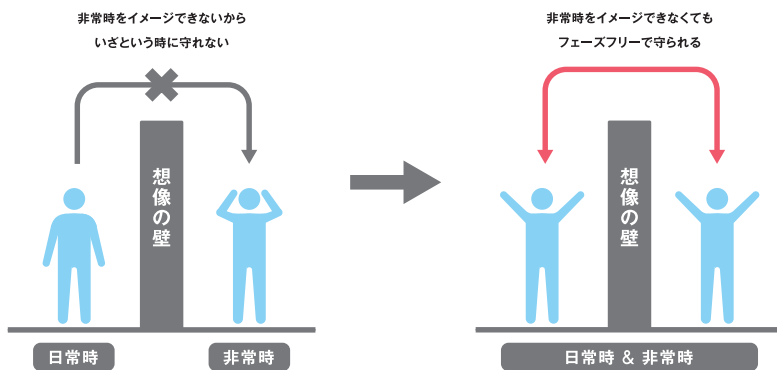


図2 「日常時」と「非常時」という2つのフェーズからフリーになってみる。

Q：フェーズフリーが取り入れられた事例などにはどんなものがありますか？

A：例えばハイブリッド車やPHV車。これらは、燃費も良くて環境にも優しくお財布に優しい、すなわちエコなんですよ。

これが、2019年の千葉付近に上陸した台風15号やその前年の北海道のブラックアウトの時に凄く話題になりましたけども、一般のガソリン車っていうのは当然電源供給なんかできないですが、電気自動車っていうのは、普段のこのエコを支えるモーターとバッテリーによって、非常時や屋外でも電源として活用することができるんですよ。だからすごく助かったっていう人が多かったんですよ。

このPHV車って防災用の車両ではないですよ。私達の生活を豊かに、便利にお得にしている車ですよ。

これってすごく取り組みやすい訳ですよ。

非常用発電機という提案は確かに非常時に役に立つんだけど、それってなかなか普及しづらいんですよ。

それよりは、日常のメリットがある中で非常時のことも提案したら、あっという間に普及してしまうっていうことなんですよ。

Q：市町村が参考となるフェーズフリーの事例について教えてください。

A：「豊島区立としまみどりの防災公園(愛称 イケ・サンパーク)」がとても参考になる先進的な事例です。(詳細は、特集2で取り扱います。)

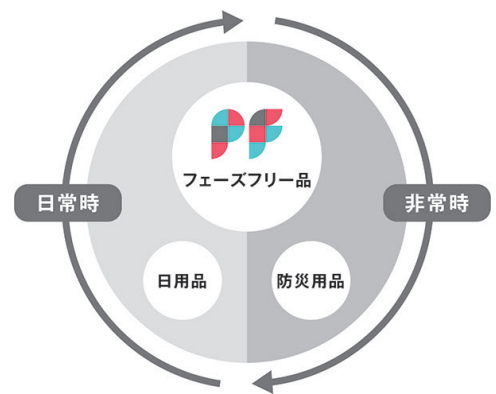
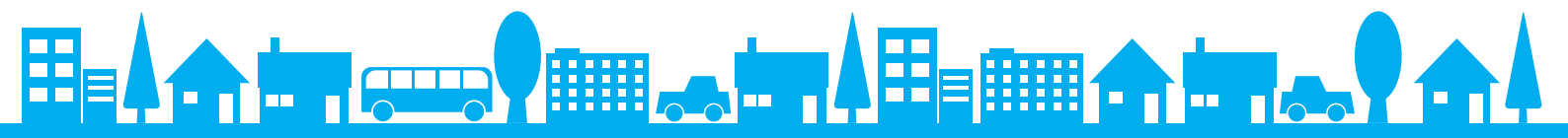
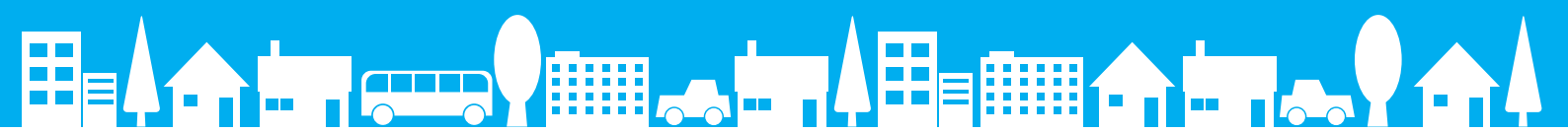


図3 いつもの生活で便利、もしもの時には役に立つ





あと、徳島県の「道の駅くるくる なると」も同様に参考になる事例です。

例えば、子供たちが滑って遊べる坂は、災害の時は高齢者や車椅子の人が安全に避難しやすいスロープになります。

今までは、国の補助金で津波避難タワーみたいなものを設置していましたが、ただ、設置した後の維持整備は自治体がやらなきゃいけない。それが難しいんですよ。

作るのはいいんだけどそれをずっと維持するのも難しいし、普段使わないから結局住民はどこにあるかわからないし、いざという時にそこに本当に逃げてくれるのかどうかもわからない。

そこで、自治体さんが道の駅をフェーズフリー、つまり普段から地域の人達が集まってる場所が非常時に役立つように進めた。

道の駅はにぎわいを生み出す場所だから自動車もたくさん停められて中に商業施設があって、家族連れも多いから、そこにスロープで、誰でも上がってすべり台みたいになって遊べるようにすることで、普段は子供達や家族連れの人たちが遊べる広場にできる。そして、津波や災害時には、物産売り場が、災害用の備蓄の食料庫になります。

災害のためだけに備蓄すると、消費期限の入れ替えなど費用がかかる。

それだったらこれを避難時、災害時の非常食に提供する旨を条件として協定を結ぶ事によって、大量の食料備蓄を一銭もお金をかけずに実現してしまう。

また、鳴門市さんは、フェーズフリーをハード面だけではなく、ソフトの部分として、教育分野でも取り組みを行っています。

例えば算数の授業で、津波の速さを子供たちに計算をさせてみたり。

今までだとキリンの走る速さ等で教えていましたが、津波と自分達の走る速さで比較したりすると、どれだけ速いかってというのがわかる訳ですね。

普段の学習に災害の視点を取り入れることで、子供たちが、災害をより自分自身の事としてとらえられる効果が期待できるといいます。

速さの事もわかって、津波の速さもわかって一石二鳥。自分事なので夢中になって学ぶ。

日常の教育の質を上げながら、非常時の子供達の生活も守る。すごく教育現場もやりやすいそうですね。避難訓練だとか、特別な先生達の負担を強いてやっていないし、特別なコストもかからない。全然負担になってないので行政としても取り組みやすい。

今、南海トラフ地震に備え、鳴門市内すべての小中学校で、フェーズフリーの導入を進めているとの事です。

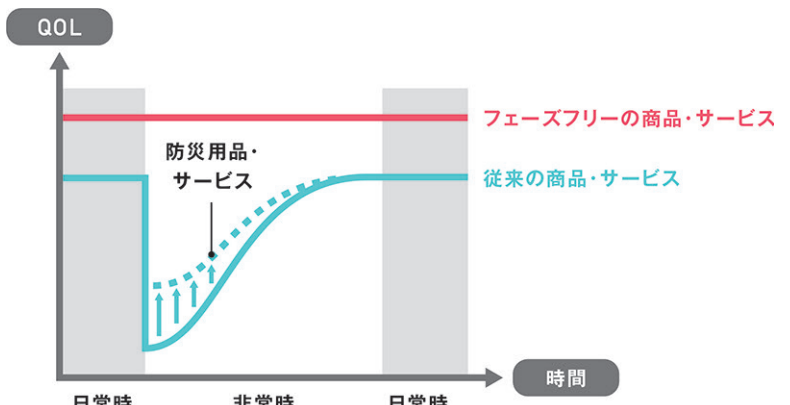


図4 “いつも”も“もしも”ももっと心地よくしてくれる不思議



終始和やかにお答えいただきました！

要は、どれだけ住民の人達が普段から喜んでくれて、その先に住民が想像できなかった、非常時に生活や命をどれだけ守れるものを作るか。

限られた危機管理予算の中で、それぞれの施策を、それぞれ少しずつ日常と非常時の視点を入れながら社会基盤をデザインしていくことによって、総体としての大きな力を総合力として、災害に強いまちづくり、また同時に、日常の豊かさも目指していければ、と思います。

——フェーズフリーについてたくさんの事例を交えながらお話を聞かせていただきました。ありがとうございました！

フェーズフリー総合サイト：<https://phasefree.net/>

